

## 筑豊産炭地と「友子」 II

安蘇, 龍生  
田川市石炭・歴史博物館

<https://doi.org/10.15017/26280>

---

出版情報：エネルギー史研究 : 石炭を中心として. 28, pp.1-9, 2013-03-22. 九州大学附属図書館付設  
記録資料館産業経済資料部門  
バージョン：  
権利関係：

## 【論説】 筑豊産炭地と「友子」 II

安 蘇 龍 生

はじめに

前号では、筑豊産炭地における「友子」の存在を概観した（註一、以下「前回論説」と称す）。今回は、その後の知見による友子取立の資料を追加報告するとともに、筑豊への友子たちの転入に関連が深い「別子銅山」と「石見銀山」の友子の動向について若干の考察をしたい。

### 第一章 友子取立状「誓言」について

この「誓言」は、明治三十（一八九七）年一月十五日、田川郡弓削田村（現、田川市）の峰地炭坑第四坑における「友子取立状」である。この資料の伝来は、前回論説脱稿後にコピーを入手したものである。女性炭坑労働者の聞き取りと事績保存に尽力されている井手川泰子氏より、筆者に提供された。同氏の説明では、当館（田川市石炭・歴史博物館）の資料館時代に初代館長の江下氏より、昔日コピーを提供されたとのことである。

現下では、江下氏ご本人に対し原資料の存在等を確認することが不可能であり、このコピー資料（以下「誓言」と称す）に依拠して論考せざるを得ない。この「誓言」は縦幅一九・三センチ、横長一六六センチ程度（末尾が破損、全体を裏打ち装丁済）であり、横長については正確には測定できない。

筆者が注目したのは、現段階での確認の限りでは、この「誓言」が筑豊地区における友子取立について、最古級の年代になることである。

峰地炭坑の初発は、明治十六（一八八三）年、福岡県築上町より蔵内保房と養父久良地政市が田川郡に同行して、弓削田起行鉱区のうち「崩れ」に小炭坑を始めた。ついで保房の養父となる蔵内次郎作の来田により、炭坑経営推進について合議が成立し、明治十八（一八八五）年から蔵内次郎作を中心として炭坑経営に乗り出した。以後、同坑は小坑乱立状態の筑豊地区では群を抜いて順調に発展していく。この明治十八年の時、坑名は近くの小字名を取り「峰地」炭坑と改称した。

峰地四坑は、先行してすでに終掘した一坑・二坑について開坑した三

坑とともに、採掘中の峰地炭坑の主力採炭現場である。同年十二月現在の峰地四坑は、事務員三人、助手一人、監量及び積込方二人、機械方三〇人、雑役五〇人、坑夫四〇〇人。出炭高は一日平均三五万斤（三坑は一五万斤程度）（註二）。峰地炭坑全体の出炭高では、明治三十一年中、約九二九一万斤（約五万五七四六ト）、同年度内比較で田川郡内七位の炭坑である（註三）。

一 「誓言」の内容

原文の一部を書き下し文にし、改行「や（欠字・読み方・語彙）挿入、句読点、傍線等は筆者による。

「誓言

逆賊ヲ誅シ、強敵ヲ破リ進退宜キヲ得、乱ヲ平ゲ社稷ヲ（国家を）保シ（やすんじ）、塗炭（非常な苦しみ）ヲ救（すくう）は將帥之力ニ於ズンバ有可ズ（あるべからず）

（※以下、他の取立状にも類似する内容が記述されており、神武天皇より徳川家康等の国家安康の功績を総括的に称える内容を意味する文面が続くので、約十六行を省略する）

：国力競争之場」裡ニアツテ、我等賤愚ニシテ国恩ニ報」ズル能ズ（あ  
たわず）、然ドモ（しかれども）、又、幸ニシ夫（それ）良質タル鑛」業  
ニ従事シ採掘ニ勉メ、以テ国産ヲ」増殖シ、以テ相為ノ大業ヲ補ヒ、国  
輝（国の隆盛）」ヲ海外ニ給事アラシメント（そばに仕えて海外に示す  
ことを）欲ス、是ニ於テ乎」有志者之壯健ナル者ヲ撰擢シ（せんてきし）、  
以テ」親子ノ盟ヲナシ、同職ニ列セシメ、這（しゃ）業（このぎょう）  
ノ盛大ヲ謀リ、聊カ（いささか）国恩ニ報ゼ」ントスル也、爾等（なん  
じら）絡トシテ（つながりとして）念シス（思い）、此盟之」義ヲ終（お

わら）セヨ

維時明治参拾年一月十五日 田川」郡弓削田村峰地第四坑ニ於テ」之ヲ

授ク

職親 イヨ 長谷川菊一（印）

職兄 イヨ 福田 勇八（印）

職子 イヨ 塩崎 寅吉

職親 イヨ 塩崎 定八（印）

職兄 イヨ 福田 勇八（印）

職子 イヨ 浅木 甚作

職親 イヨ 高橋 兵太（印）

職兄 イヨ 岡部栄三郎（印）

職子 イヨ 元木富太郎

職親 イヨ 近藤新太郎（印）

職兄 イヨ 岡部栄三郎（印）

職子 イヨ 福田 小平

浪人立會 石見 白井 清吉（印）

客入立會 キイ 内田 菊松（印）

田川採炭坑飯場立會 イヨ 三浦竹五郎（印）

出雲 伊藤 住助（印）

石見 堀田由太郎（印）

石見 石橋 菊太（印）

金谷炭坑飯場立會

土佐 武吉 政宗（印）

石見 堀江庄太郎 (印)

當飯場立會

イヨ 菅 忠次郎 (代印)

中老立會 イヨ 伊藤淺之助 (代印)

イヨ 重松住太郎 (印)

世話人 イヨ 三品辰之進 (印)

イヨ 寺川 熊吉 (印)

峰地炭坑第四坑

坑夫飯場

◎◎之者共 何レ之諸鑛山へ」廻涉致共、其地規定之通り」  
為相守 (あいまもらせ)、何分之御際情成被降」◎◎ヲ及御依頼候也

福岡縣田川郡弓削田◎ (村カ)

峰地炭坑

峰地炭坑第四坑事務所印

◎◎諸鑛山

(紙面に破損欠落部分有あり)

(※注 ◎◎は欠損による欠字)

二「誓言」にみる人々

前記一の「誓言」中には、二十五人の坑夫が記名している。その出身地を見ると、そのうち十八人が伊予国出身である。続いて石見が四人、出雲、土佐、紀伊各一人である。しかも、四組の職親、職兄、職子が全

員伊予出身である。

通常、友子の取り立ての前提は、職子は職親に弟子入りして、六年六月二十日の修業期間が必要とされている。しかも四組のうち職兄は、二人でそれぞれ二組の職兄となっている。これから勘案すると、この四組のグループは、あるきっかけで職親、職兄、職子の関係を保ったままに、グループとして峰地炭坑にやってきたと考えた方が妥当と思われる。それは、この四組のグループの生国(出身地)がすべて伊予であることから、次の第二章で考察する内容と密接な関連があると推量される。しかも、上記の「當飯場立會人」も「中老立會」も「世話人」もすべて伊予国出身であることも、峰地炭坑の経営意図が濃厚に反映した友子の存在を示すと言えるようである。

これは、末尾の「峰地炭坑第四坑 坑夫飯場」に押印がなく、その後の「峰地炭坑」の押印が「峰地第四坑事務所印」であることでも、経営側の強い意図が反映した友子取立であることが感じられるのである。

これに関連する同様の指摘は、前回論説でも触れていた。例えば、明治四十二年六月十三日発行の貝島太助経営の満之浦礦業所の記名に「満之浦人事係之印章」を坑夫飯場の記名・押印と並べて、取立帳に記名・押印しているのと同様の背景であろうと考えられる。

その動機は、明治三十年という年代から見て、より強い意図、つまり先進技術の保有者としての「友子」の受け入れと確保を、積極的かつ強力に推進したと理解するのである。

また、この明治三十年の峰地四坑の「誓言」に記名した全員が伊予出身という特別な事例でもあり、これは、当時の筑豊各炭坑での友子導入の事情を如実に示すものと思量する。あえて言えば、筑豊の各炭坑にお

いて、友子の導入や確保の競合的な事象の存在が推定できるのである。

なお、「誓言」中にみる、浪人立会（石見）・（紀伊）、客人立会（伊予）、田川採炭坑飯場立会（出雲）・（石見）・（石見）、金谷炭坑立会（土佐）・（石見）等、取立式に立ち会った他坑や浪人や客人などの友子の動向からみると、明治三十年以前に相当数の友子たちが筑豊に入っていることが伺える。これは、前号で予測した年代よりも相当前にかなり広く友子が筑豊地区で活動していたと言える。

それは、友子の四つの機能「労働者の養成」・「労働力供給調整（含む移動に際して便宜を与える）」・「労働者による自主管理」・「独自の共済制度の存在」→これらが、友子自身の希求する伝統保持と保身と利益確保に繋がるとともに、炭坑業の近代化への発展のテンポが速く、熟練労働者の不足を来した炭坑経営側にとつても、極めて都合のよい制度であったと言える。現実には、飯場制度を発展させつつ、友子を受容し熟練労働者を確保する手段ともなっていたと言える。

## 第二章 住友忠隈炭砒と友子

### 一 住友の筑豊産炭地への進出

「明治二十年代に入ると新居浜精錬所・別子精錬課で洋式精錬が活発になり、コークスの需要が増加した。：一方、石炭の消費量も蒸気機関の積極的導入により、明治二十六年には二十三年の約四倍の一五二万貫目にまで激増した。翌二十七、二十八年の石炭・コークス合計高は、約二七七万三六〇貫目となり、木炭消費量を凌駕するようになった。：木炭に将来性はなかった。今後は、洋式溶鉱炉・蒸気機関の発展に伴うエネルギー

ギー源として、どうしても石炭業へ進出しなければならなかった。」（註四）

「明治二六（一八九三）年十一月、住友は、筑豊炭田の中央に位置している庄司炭砒（福岡県嘉穂郡大谷村大字庄司、現在の飯塚市幸袋町）を買収した。：しかし、住友が入手した庄司炭砒は：ようやく月産一五〇〇ト程度の出炭は確保できたが、鉱区面積からしてそれ以上の発展は望めなかった（この炭砒は以後一〇年間稼行し、三五年六月採炭を止め、：山本乙次郎なる人物に：譲渡した。」（註五）

「忠隈炭砒は、庄司炭砒取得の半年後、明治二七（一八九四）年四月八日に、麻生太吉から一〇万八〇〇〇円の巨費を投じて買収した。：住友は麻生の苦しんでいる断層が非常に大きく堅いことも十分承知していたが、炭量が多く炭質も優良で、さらに庄司炭砒とは比較にならない五九万余坪の大鉱区のうえ、周辺には未着手の鉱区もあって増区も可能であると判断した。また、前年（二六年）には鉄道が飯塚まで延長開通して忠隈の交通が至便であったこと、麻生家が信頼のおける土地の名家であることなどが住友の判断を促した。：以来、忠隈炭砒は住友七〇年の稼行に耐え、住友の石炭採掘業の支えとなるのである。」（註六）

忠隈炭砒の推移を詳述することは本稿の主意ではないので、事後の展開の一端を例示して参考に供したい。

「福岡鑛務署管内鑛區一覽 大正二年七月一日現在」（註七）によれば、同砒は飯塚・穂波にまたがる鉱区坪数一三九万二〇五八坪に拡大し、前年鉱産額は石炭六八八、六三七、三五九斤（約四一万三二七ト）となっている。

さらに、「西部炭田名士選集」（註八）によれば、職員数一五八人、助手六五人、鉱夫二〇六四人、傭夫七六人（昭和十年現在）、鉱区はさら

に拡大し、飯塚市・穂波町・稲築町にまたがる鉱区一四三万一七六四坪の大炭鉱となり、五年間の出炭状況は、四九万二〇八ト（昭和三年）・四九万九三三八ト（昭和四年）・四六万〇一七九ト（昭和五年）・三九万一四七一ト（昭和六年）・三五万九〇三八ト（昭和七年）を記録している。

## 二 伊予の「友子」たちの筑豊への渡来

住友が筑豊に進出して、忠隈炭鉱の経営に本腰を入れるにあたり、麻生が困難とした断層対策がまず必要であった。したがって、住友の忠隈炭鉱経営開始とあいまって伊予にいる住友配下の友子たちを投入したのであることは、必然的な成り行きと言える。（前回論説にも記しているように、断層を切り抜くことは友子たちにとっては、お家芸ともいえる採掘技量であった。山本作兵衛もこのことに注目し、その技量を強調した炭坑記録画を数枚描き残している）

その直接的な根拠を調査するために、過日、愛媛県新居浜市に出向き、別子銅山記念館、新居浜市別子銅山記念図書館等に訪問して調査した。そこで所期の目的（「忠隈炭鉱買収後、採掘を開始するにあたり「配下の友子」を移動させ、投入した」という事実を資料的に確認すること）を直接的には確認することができなかった。

しかしながら、以下、忠隈炭鉱の友子たちが、筑豊産炭地において中心的な役割、活動を展開したことを記して、この課題の傍証としたい。

## 三 「梅吉資料」に見る「友子」

### ① 忠隈炭鉱の「友子」

明治三十八年十月二十三日、和田梅吉の「奉願帳」作成にあたり、隣山立会人となった忠隈炭鉱の立会人三名は、石見国、長門国、伊予国出

身である。奉願帳を手にした梅吉は、明治三十八年十一月十三日より明治四十一年二月二十五日死去するまで、二年三カ月余、友子を頼って各地各坑を巡回した。

その和田梅吉が「奉願帳」を携えて、明治三十八年十一月十三日、まず最初に訪問したのが、忠隈炭鉱である。この時の同坑の飯場坑夫一統の寄付金三十銭は、他に明治第二坑の三十銭をみるのみで、この三十銭は飯場坑夫一統の寄付金としては筑豊では最高額である。また、同坑の個人寄付者四十二名・合計十一円八十銭も寄付者数、金額ともに巡回中、最高の人数・金額である（ただし、金額としては、奉願帳作成時、梅吉自身が所属する発起坑高雄二坑の飯場坑夫一統十五円、同坑立会人・世話人等四十円八十銭の寄付金の額は特別な別格の高額と言える）。

② この十一月十三日の忠隈炭鉱寄付者四十二人をみると、このうち伊予出身十五人、石見出身五人、讃岐四人となっている。住友が麻生より買収した明治二十七年四月から十年余の経過の頃、各地より参集した友子の中で、やはり伊予出身が群を抜いて多数を占めていた。

前記の立会人三人と個人寄付者四十二人を合わせて、出身地別に表記する。この出身地別表は、住友が忠隈炭鉱を買収し約十一年六カ月が経過した時期でありながら、寄付行為に応じた友子の中では、やはり伊予出身が群を抜いて多数であることを示している。

### ③ 奉願帳を発行した高雄二坑飯場友子の出身地

和田梅吉に奉願帳を発行した高雄二坑の飯場立会人七名と世話人二人、寄付者十人の出身地をみると、伊予二人、豊前・備前・長門・安芸・播磨・石見・美作・越前・大分各一人、出身国不記入八人である。

### ④ 隣山立会会をした潤野炭坑の立会人三人と寄付者二十人の出身地を

出身地	人数 (人)
伊予	16
石見	6
岐	4
芸	3
土佐	2
備中	2
備後	2
雲州	1
門作	1
紀美	1
能登	1
坂崎	1
分前	1
大宮	1
大豊	1
なし	1
国名計	45

みると、伊予七人、石見三人、出雲三人、長門・芸・土佐・備前・備中・加賀・大和・日向・豊前・肥後各一人となっており、伊予出身が目立っている。

⑤ 和田梅吉の巡回中寄付者の友子で伊予出身が多い炭坑は、平山炭坑（九人中四人）、糟屋郡植木炭坑（九人中六人）が目立っている。

⑥ 寄付者中、石見出身が多い炭坑としては、目尾炭坑（十一人中四人）、御徳海軍炭坑四坑（六人中三人）、伊田炭坑二号飯場（七人中四人）、峰地炭坑（十人中五人）、糟屋郡山田村猪野銅山（七人中四人）が目立っている。

梅吉資料だけでも、筑豊には伊予出身と石見出身の友子が多数にのぼっている。伊予出身が多い背景には、前述している住友の忠隈炭坑の買収が、大きなきっかけとなったのではと考えられる。友子たちが忠隈炭坑に多数入り、さらにその影響や有利な就労口を求めて、伊予から筑豊産炭地に伝来し、各坑に展開したとみられるのである。

石見出身の友子が多い背景には、石見銀山の閉山と関連が強いと考えられる。「江戸幕府による石見銀山支配も、一八六六年（慶応二）七月、長州軍の進攻により終焉を迎えた。この頃には産銀は三十貫目（約

百十二<sup>キ</sup>）にも落ち込み、そのため明治政府のもとでは民営鉱山として出発することとなった。当初、地元住民によって経営されたが、八七年（明治二十）に至って大阪の鉱山会社、藤田組が操業を開始した。…また、九五年（明治二十八）には福石鉱床の開発を目論み…期待通りの成果が上がらず、わずか一年半ほどで操業を終了した。一九〇五年（明治三十八）には、有用鉱物を豊富に含んだ富鉱帯が発見されたのを契機に鉱山の近代化が急激に進められ、二二年（大正元）～一七年（大正六）には、年間に銅四百五十<sup>ト</sup>を生産した。しかし、第一次世界大戦後の銅価格下落、採鉱環境の悪化により、二三年（大正十二）ついに休山を余儀なくされた。昭和に入り、…四三年（昭和十八）の水害によって、約四百年間にわたる鉱山の歴史に終止符が打たれることになる。（註九）石見銀山の消長と友子の拡散について、その背景をみるためには、この説明文が適切である。

この説明文でわかるように、近代になり石見の友子たちは就労の道を断たれて、生活のために他地域に拡散・流出せざるをえなかったと解釈する。その一環として、前述のように筑豊地域や糟屋地域に滞留したとみられる。

#### 四 忠隈炭坑「坑夫免状」（明治四十五年二月十日発行）にみる友子

住友が買収し、操業して二十年を経過すると、在籍する友子たちの出身地も多様になってくる。「坑夫免状」の記載内容から考察する。

坑夫免状を付与されたのは六人である。この出身国をみる。

親 分 兄 分 子 分

- ① 加賀国産 美作国産 伊予国産
- ② 播磨国産 丹後国産 伊予国産

※坑夫に取り立てられた六人のうち伊予出身が三人いるが、仮に修業期間を原則の六年六月二十日として、子の六人はたまたま各親分に弟子入りして、規定の期間修業したに過ぎず、特段の事情は存在しないと解釈する。

- ③日向国産 豊後国産 備中国産
- ④日向国産 摂津国産 伊予国産
- ⑤日向国産 豊後国産 阿波国産
- ⑥伊予国産 豊後国産 肥前国産

浪人立会 伊予国産

客人立会 備後国産・但馬国産・伊予国産・伊予国産・日向国産

潤野炭坑立会人 備中国産・伊予国産・伊予国産・備後国産・伊予国産

豆田炭坑立会人 伊予国産・石見国産・備中国産・出雲国産・伊予国産

美作国産・備中国産・土佐国産・伊予国産・伊予国産

讃岐国産・伊予国産・美作国産

鍛冶屋立会人 伊予国産

当飯場立会人 東京府産・伊予国産・伊予国産・伊予国産・伊予国産

讃岐国産

中老立会人 日向国産・紀伊国産・伊予国産・豊後国産・安芸国産

筑後国産

議媒人 備後国産・豊後国産・伊予国産・備中国産・日向国産

後見人（国不記入）

この段階の忠隈炭砒の鍛冶屋立会人、当飯場立会人、中老立会人、議媒人をみると、十九人中七人が伊予国出身であり、伊予国出身はやはり多数とみる。つまり、住友が忠隈を買収して以来、他地区の出身者の友子が、少しずつ渡来、その後の養成を含めて忠隈炭砒内に増加していったと思われる。

この取立の時、隣山立会である潤野炭坑立会人には一〇人中五人、豆

田炭坑立会人八人中三人が伊予出身である。忠隈炭砒以外の各坑にも、多数の伊予出身の友子がいたとみられる。

### 第三章 まとめに代えて、今後の課題など

#### ① 友子関連地域への訪問と調査から

和田梅吉が奉願帳を携えて、日本を半周近く巡回したことに鑑みて、その実感の一部を体験したく、過日、石見銀山（島根県大田市）と別子銅山（愛媛県新居浜市）の旧跡を訪ねた。

今回の巡検は、乗合バスや貸切タクシーに乗って回った。道路が整備されている現在でも、石見銀山も別子銅山も、まさに山中深くわけ入らねば、友子のいる飯場にはたどり着かないのを実感できた。

もし当時のように、徒歩または当時山中で使用していた鉱石運搬用の索道などを利用するとすれば、どんなにか苦痛にさいなまれたこと

だろうと思  
い知った。

和田梅吉の  
行く先々に  
は、同情愛  
に溢れた友  
子仲間がい  
て、暖かく  
受け入れて  
くれたとは

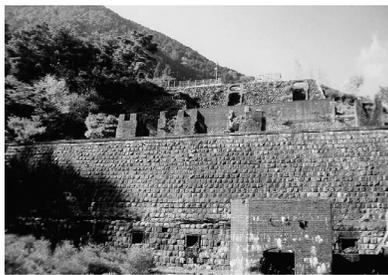


写真1 別子銅山（東平地区）

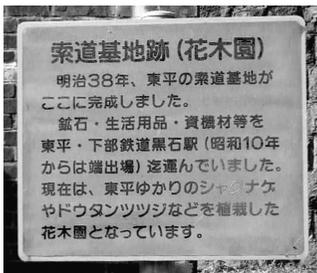


写真2 同上



写真3 友子仏参墓（いわき市八茎鉱山）

思われる。しかし、和田梅吉の二年三カ月の巡回の間、しばしば停滞または病臥したと思われる空白期間がみられるのも当然であり、排尿障害の身体をおして各地の鉱山現場の友子仲間の飯場をめぐることは大変な負担となり、まさに命がけの行動であったと実感した。

## ② 今後の展望と課題

上記の訪問の際、石見銀山資料館では仲野義文館長とも面談、意見交換とともに展示中の「友子取立状」を確認でき、今後の連携を約した。また、別子銅山記念館では、田尾邦雄館長から同館所蔵の「友子取立帳」を確認させていただいた。その中でも住友別子銅山の友子取立帳一つには、一度に四十三人を数える多人数の友子取立の確認もできた。今後は、石見銀山や別子銅山の友子の実態の研究深化と、その筑豊との関連等を課題にしなければと痛感した。

さらに、過日、福島県いわき市を訪問した。その折、現地の方々のご配慮で、いわき市石炭化石館保管の二つの奉願帳や個人所有の取立状も確認できた。あわせて、石炭関連史跡をめぐるとともに、他の資料館に所在する友子資料や山中の墓地にある友子関係者の墓地等を予備的に調査することができた。また、最近訪問した秋田県では、炭坑以外の金属鉱山の友子の情報をいくつか知ることができた。

これらの体験から、各地の友子研究の

連携がごく部分的にあり、ほとんど個々になっていて、繋がっていないと感じた。

以上の経験を重ねて感じるのは、各地の関係者と情報の共有や連携した共同調査・研究を進めなければ、埋もれかけていた友子関係資料の再発見と活用に繋がらないことである。この方法等については、先進的な研究者各位のご指導をいただく必要もあり、今後の検討課題としたい。

## 【謝辞】

本稿の執筆、または各地の友子関連資料の調査については、以下の方々に有益なご教示をいただいた。記して感謝の意を表します。（敬称略、順不同）

井手川泰子、仲野義文（石見銀山資料館館長）、田尾邦彦（住友別子銅山記念館館長）、坪井利一郎（別子銅山記念図書館）、松岡俊雄、野木和夫（常磐炭田史研究会会長）、熊澤幹夫（いわきヘリテージ・ツーリズム協議会事務局長）、渡邊文久（いわき市石炭化石館）

## 【註】

- (一) 安蘇龍生二〇一二「筑豊産炭地と「友子」」『エネルギー史研究第二七号』
- (二) 高野江基太郎一八九八『筑豊炭礦誌』六四四頁
- (三) 「筑豊五郡石炭鉱区一覽表」『田川市史 中巻』八八〇頁
- (四) 住友金属鉱山株式会社一九九一『住友別子銅山史 上巻』四三八～四三九頁

(五)住友石炭鉱業株式会社史編纂委員会編一九九〇『わが社のあゆみ』

一七〇一八頁

(六)註五文献一八〇一九頁

(七)『福岡鑛務署管内 鑛區一覽 大正二年七月一日現在』四十頁

(八)西部炭田名士選集刊行會一九三六『西部炭田名士選集』五三七頁

(九)仲野義文二〇一二「銀山の発見と開発の歴史」『週刊 日本の世界遺産 二一〇』朝日新聞出版一七頁

※お詫びと訂正

今回梅吉資料を再度読み直したところ、前回論説の統計中に欠落がありました。深くお詫びするとともに、以下の訂正をお願いします。

前回論説訂正箇所

○「表5」Dグループ↓「二月七日、糟屋郡山田村猪野銅山九十銭」を追加

○「表4」三段目「福岡県内炭坑（糟屋・三池）」中「飯場等の数」  
(誤)「5炭坑飯場」↓(正)「4炭坑飯場と1銅山飯場」

※寄付金額および総合計金額は変更ありません